

『がんばらない』からの学び

先日、NHK番組に諏訪中央病院の鎌田實先生が出演されていた。鎌田先生は『がんばらない』の著者でも有名な方である。

諏訪中央病院（長野県）という、“いつつぶれてもおかしくない病院”に赴任された先生は、その後、同僚の先生方と一緒に病院を立て直し、地域医療の全国モデルと言われる病院にまでしてしまう。今では見学に訪れる医療関係者も後を絶たない。

その鎌田先生が病院や在宅での患者との関り、ホスピス、また自らの生い立ちから両親の死のことまでの色々な思いをソフトな文章で綴った本が『がんばらない』である。私はこの本を読み、その後NHK番組でのお話を聞くことで、多くの感動と学びを得たが、中でも2つのことが強く心に残っているので、そのことについて書いてみたい。

『がんばらない』という言葉の意味。ホスピスを訪れる患者、あるいは既に最先端の医療を十分受けながらも病状が悪化しつつある患者は、もはや心身ともに疲れきった状態であると言える。この状況下において、もはや“がんばれ！”という言葉はその人をさらに鞭打つかのように追い詰めてしまう可能性がある。“ここまで一生懸命頑張ってきたのに、どうしてこれ以上頑張ることができようか”。率直な思いだと思う。

私も大学病院時代、多くの血液がんの方を診てき

たが、どんな患者にも何も考えずに“頑張ってください”と励ましていた時期があった。その言葉を受けることで逆に苦しむかもしれないなどは考えてもみなかった。励ますことが当然だと思っていた。それが、どんなにか無責任な言葉である、ということが分かったのはごく最近のことである。

鎌田先生は『がんばらない』の言葉の中には『あきらめない』、『希望を捨てない』、という2つの意味が込められていることを強調していた。『もう、あなた1人でがんばらなくてもいい。でもあきらめず、希望も捨てずに1日1日をあなたらしく生きてください。私たち医療者があなたのために頑張りますよ。』そんな希望を支える言葉でもあるのだ。

もう一つ、鎌田先生が自らの母親を看取った時の話である。

たまたま遊びに来ていた母親が脳卒中で倒れ、危険な状態に陥る。既に意識も無く、呼吸状態も厳しい。気管の中に管を入れて、人工呼吸器で呼吸を補助すれば1週間は延命できるかもしれないが、このままではもう駄目であ

ろう。しかし管を入れることはかえって苦しみを延ばすだけ。鎌田先生は母親のことを思い、そのまま自然の形で看取ることを考えていた。

しかし、実家から駆けつけた父親がそれを聞いて息子の鎌田先生を怒鳴りつけたそうである。『全力をつくして、やれることをやれ！』と。結局、人工呼吸器につなぐこととなるが、その甲斐なく1週間後に母親は亡くなられた。父親は鎌田先生に穏やかな表情で感謝の言葉を述べたそうである。



私も自分の家族では無いが、医療者としてよくこのように最後の選択に迫られるときがある。患者が末期がんや、このケースのように高齢の、もはや回復の難しい方の場合、あまり積極的に延命治療を勧めないことも多い。しかし、この話を聞いた時、今まで自分がやってきたことは何となく偉そうに分かったような口をきいているだけで、実際のところその患者の家族の立場に立っていたのだろうか、と考えさせられる。鎌田先生の父親は駄目だと分かっている、あと1週間だと分かっている、延命治療を選択した。結果は明らかであったが、しかし小さな希望を抱き、同時に妻の死をゆっくりと受け入れる時間を持つことができた。納得もできた。

本人を中心に考えれば、延命という選択は不本意であるかもしれないが、残された家族にとってはどうなのか。必ずしも答えは1つではないように思う。この話は、これから自分がホスピスをやっていく上で、今一度自分の中で整理しなければならない問題である。ホスピスが本人とその家族を支えるプログラムであるのなら、それは延命という選択肢も時にはあり得るのかもしれないと…。

大事なのはそういった気持ちを持つ家族もいて、我々はそのような思いを理解する姿勢を持つこと。自分の価値観だけで判断してはいけない、ということなのだと思う。

